

Overview: 全焼のささげ物が予表するのは、神のために絶対的な生活をするキリスト、また神の民にそのような生活をさせることを可能にするための命であるキリストです。私たちは、最初にキリストを私たちの全焼のささげ物として必要とします。なぜなら、私たちの神の御前での最初の状況、私たちと神との最初の問題は、違犯の事柄ではなく、神のためでないという事柄であるからです。神が私たちが創造したのは、私たちが彼の表現また代行となるためでした。しかし、私たちは墮落した人として、自分のために生きており、彼のために生きていません。私たちは、自分が神のために絶対的でないこと、また自分の中では神のために絶対的になることはできないことを認識する必要があります。それから、私たちはキリストを私たちの全焼のささげ物とする必要があります。今日、私たちのクリスチャン生活と召会生活において、常にささげる全焼のささげ物に対する必要があります。常にささげる全焼のささげ物の生活することは、生きた犠牲になることです。神に対する私たちのすべての奉仕は、全焼のささげ物の祭壇の火に基づいていなければなりません。

I. 全焼のささげ物が予表するのは、おもに人を罪から贖うことにおけるキリストではなく、神のために絶対的な生活をするキリスト、また神の民にそのような生活をさせることを可能にするための命であるキリストです:

A. レビ記において最初に述べられているささげ物は、罪のためのささげ物でも違犯のためのささげ物でもなく、全焼のささげ物です:

1. 私たちは、最初にキリストを私たちの全焼のささげ物として必要とします。なぜなら、私たちの神の御前での最初の状況、私たちと神との最初の問題は、違犯の事柄ではなく、神のためでないという事柄であるからです:

a. 神が私たちが創造したのは、私たちが彼の表現また代行となるためでした。

b. 神が私たちが創造したのは、私たちが彼のためになるためであって、私たち自身のためになるためではありませんでした。しかし、私たちは墮落した人として、自分のために生きており、彼のために生きていません。

2. 全焼のささげ物が意味するのは、神を表現し代行するために神によって創造された人として、私たちが神以外のもののためであるべきではないということです。

3. 私たちは、自分が神のために絶対的でないこと、また自分の中では神のために絶対的になることはできないことを認識する必要があります。それから、私たちはキリストを私たちの全焼のささげ物とする必要があります(レビ1:3-4):

a. 私たちの全焼のささげ物としてのキリストは、完全に神のためであり、絶対的に神のためです。『主イエスであったものは何であれ、彼が語ったことは何であれ、彼が行なったことは何であれ、絶対的に神のためでした。』

B. ヨハネ第7章は、キリストが全焼のささげ物として完全に資格づけられていたことを啓示しています:

1. 主は制限された生活を生き、自分のために事を行わず、神の栄光を求め、神の満足のためでした。

2. ヨハネ第7章16節から18節にかけて私たちが見るのは、主イエスが自分の栄光を求めなかったため、ご自分から語らなかったということです。彼は彼を遣わされた方の栄光を求めました。

3. ヨハネ第7章が啓示しているのは、主イエスが神によって制限された人であったこと、彼が神に属していたこと、彼が神によって遣わされ、神から来たこと、彼がご自分の言葉を語らず、神を語ったことです。

4. 主が神の言葉を語った時、神は主の語かけを通して表現されました。神は主の語かけを通して主から出て来ました。

5. 私たちはヨハネ第7章において、主イエスが全焼のささげ物の実際であることを見ます。なぜなら、彼は神によって制限されていて完全に神のためである生活をしたからです。

II. 全焼のささげ物の予表において、神聖な三一が啓示されています:

A. レビ記第1章3節、8節、9節において神聖な三一を啓示している重要な項目は、全焼のささげ物、集会の天幕、エホバ、祭司、火、水です。

B. 全焼のささげ物は、神を満足させる食物としてのキリストを予表しています(3節)。』

C. 集会の天幕は、ささげる場所としての子なるキリストを予表しています:

1. ささげ物は集会の天幕の入り口でささげられました。ささげ物が合法化されるためには、他のいかなる場所でもささげられることはできませんでした。2. 何かを神にささげるために、私たちはキリストを、ささげることの立場としなければなりません。

D. レビ記第1章において、子なるキリストがエホバにささげられているので、「エホバ」はささげ物を受ける方としての御父を指しています。

E. レビ記第1章8節と9節において、ささげ物の奉仕をした祭司は、奉仕する方としての子なるキリストを予表しています。彼は私たちの大祭司であり、またメルキゼデクの位による永遠の祭司です。

F. 全焼のささげ物、集会の天幕、祭司によって予表されているように、子なるキリストは同時に、ささげ物、ささげ物の場所、ささげ物の奉仕をする方です。

G. 火は、受け入れる手段としての神を表徴しています: 1. 火は焼き尽くし、飲み尽くします。神はささげ物を焼いて煙を立ち上らせることによって受け入れました。

2. 全焼のささげ物を焼く火は、神ご自身でした。火は神の口でした。

3. 全焼のささげ物を焼くことは、神聖な食糧を食べることでした。

H. 全焼のささげ物の内臓と脚を洗った水は、洗う手段としてのその霊を表徴しています。キリストの内側の各部分と彼の日ごとの歩みは、絶えず聖霊によって洗われて、地的な事物と接触することによって汚されることから、彼を守っていました。

I. レビ記第1章3節、8節、9節において私たちは、神聖な三一全体が全焼のささげ物と関係があることを見ます。』

III. 今日、私たちのクリスチャン生活と召会生活において、常にささげる全焼のささげ物に対する必要があります: A. 神の民は毎日、全焼のささげ物をささげる必要がありました。朝だけでなく、夕にもささげる必要がありました。安息日ごとに、毎月の始めに、毎回の祭りの時に、特別な全焼のささげ物が必要でした。

B. 全焼のささげ物に関する要求のゆえに、青銅の祭壇は特に、「全焼のささげ物の祭壇」と呼ばれていました。

C. 全焼のささげ物は常にささげるささげ物であり、全焼のささげ物の火は絶えず燃えているべきであり、日夜燃えていなければなりません:

1. 「全焼のささげ物は祭壇の火床の上に、夜通し朝まであるようにし、祭壇の火はそこに燃え続けさせなければならない」; a. 「祭壇の上の火は、その上で燃え続けさせなければならない。それを消してはならない」。 b. 「火は祭壇の上で絶えず燃え続けさせなければならない。それを消してはならない」。

2. 「夜通し朝まで」が表徴するのは、全焼のささげ物がこの時代の暗い夜を通して、朝まで、すなわち主イエスが再び来られるまで、焼く場所に残っているべきであるということです。3. 祭壇の上で火を燃え続けさせることは、宇宙

IV. 常にささげる全焼のささげ物の生活することは、生きた犠牲になることです:

A. 全焼のささげ物は私たちの献身の予表であり、私たちが自分を神に、生きた犠牲としてささげることの予表です。献身の意義は、自分を神に、生きた犠牲としてささげることです。

B. 旧約における日ごとの全焼のささげ物が予表しているのは、新約において、神に属する私たちが日ごとに自分を神にささげるべきであるということです。

C. ローマ第12章1節の犠牲は生きています。なぜなら、それは復活を通して命を持っているからです:

1. 生きた犠牲であることが意味するのは、私たちが絶えず自分を主にささげることです。

2. 私たちが絶えず自分を主にささげるなら、主は絶えず私たちを用いることができます。

D. この犠牲は聖なるものです。なぜなら、それは地位において、キリストの血によって、この世からも、すべての俗的な人、事物からも、神へと分離されているからです。さらに性質において、天然の命と旧創造は、神を満足させるために、神の命と神の聖なる性質を伴った聖霊によって聖別され、造り変えられています。ですから、この犠牲は神に喜ばれるものです。

E. ローマ第12章1節において、体は複数ですが、犠牲は単数です: 1. 多くの体がささげられても、それらは一つの犠牲となります。これが暗示しているのは、私たちは数は多いのですが、キリストのからだの中での私たちの奉仕は、多くの分離した、かわりを持たない、個人の奉仕であってはならないということです。2. 私たちのすべての奉仕は、一つの全体的な奉仕を構成しているべきであり、この奉仕は唯一無二でなければなりません。なぜならそれは、キリストの中の一つからの奉仕であるからです。』

における聖なる火としての神が、食物として神にささげられるものを受け(焼いて煙を立ち上らせる)用意が常にあることを表徴し、また神にささげられるものを受け入れる神の願いが、決してやまないことを表徴します。

D. 全焼のささげ物の予表が私たちに見せているのは、私たちが常にささげる全焼のささげ物の生活、火が祭壇の上に終日、燃えている生活をする必要があるということです。』

3. 召会生活全体は、神を満足させる全焼のささげ物です。4. 信者たちは自分の体を生きた犠牲としてささげることによって、キリストのからだの中で生きています。からだの生活をするために、私たちは自分の体を主に、そして主のからだにささげる必要があります。

V. 神に対する私たちのすべての奉仕は、全焼のささげ物の祭壇の火に基づいていなければなりません:

A. 神はイスラエルの子たちの奉仕がこの火に基づいていることを欲していました。B. 私たちが召会生活の中で神にささげる奉仕は、全焼のささげ物の祭壇の上の火に源がなければならず、私たちの奉仕は神の火の燃えることから出て来なければならず、またこの火の結果でなければなりません。』

第一日: レビ1:3 その人のささげ物が、牛の群れからの全焼のささげ物であるなら、彼は傷のない雄を献げなければならない。それを集会の天幕の入り口で献げて、彼がエホバの御前に受け入れられるようにしなければならない。

ヨハネ4:34 イエスは彼らに言われた、「私の食物とは、私を遣わされた方のみこころを行ない、彼のみわざを成し遂げることである」。

ヨハネ5:19 イエスは彼らに答えて言われた、「まことに、まことに、私はあなたがたに言う。子は、父が行なわれることを見ないでは、自分から何もすることができない。父が行なわれることは何であれ、子も同じように行なう。30 私は自分からは何も行なうことができない。私は聞くとおりに裁く。そして私の裁きは正しい。なぜなら、私は自分の意志を求めないで、私を遣わされた方のみこころを求めらるからである。6:38 なぜなら、私が天から下って来たのは、自分の意志を行なうためではなく、私を遣わされた方のみこころを行なうためだからである。

第二日: ヨハネ7:16 イエスは答えて言われた、「私の教えは私のものではなく、私を遣わされた方のものである」。18 自分から語る者は、自分の栄光を求める。しかし、遣わされた方の栄光を求める者は、真実であり、彼の中に不義はない。

第三日: レビ1:8 そして、祭司であるアロンの子たちは、そのそれぞれの部位と頭と脂肪を、祭壇の上にある火の上の薪の上に整然と並べなければならない。9 ただし、その内臓とその脚は水で洗わなければならない。そして祭司は、そのすべてを祭壇の上で、全焼のささげ物として焼いて煙を立ち上らせなければならない。それは火によるささげ物であり、エホバを満足させるかおりである。

ヨハネ7:38 私の中へと信じる者は、聖書が言っているように、その人の最も内なる所から、生ける水の川々が流れ出る」。39 イエスはこれを、彼の中へと信じる者たちが受けようとしているその霊について言われたのである。まだイエスの栄光が現されていなかったため、その霊はまだなかったからである。

第四日: Ⅱペテロ1:19 また、私たちはさらに堅くされた預言者の言を持っています。夜が明けて明けの明星があなたがたの心に昇るまで、その言を、暗い所に輝くともし火のように、よくよく心にとめていなさい。

レビ6:13 火は祭壇の上で絶えず燃え続けさせなければならない。それを消してはならない。

第五日: ローマ12:1 兄弟たちよ、こういうわけで、私は神の慈しみを通して、あなたがたに勧めます。あなたがたの体を、神に喜ばれる、聖なる、生きた犠牲としてささげなさい。それが、あなたがたの理にかんじた奉仕です。5 私たちも数は多いのですが、キリストの中で一つからだであり、そして各自は互いに肢体なのです。

第六日: レビ9:24 その時、火がエホバの御前から出て来て、祭壇の上の全焼のささげ物と脂肪の部分焼き尽くした。すべての民はそれを見ると、鳴り響く喜びの叫び声を上げ、顔を地に伏せた。

ローマ12:11 熱心で怠けることなく、霊の中で燃え、主に仕えなさい。

出エジプト3:2 すると、エホバの御使いが、いばらやぶの中から火の炎の中で彼に現れた。彼がよく見ると、いばらやぶがあり、火で燃えていたが、いばらやぶは燃え尽きなかった。

《預言の準備》

経験①: 人は、絶対的に神のために生きるべきである

もし私たちが決してキリストを全焼のささげ物として享受したことがないなら、自分がいかに罪深いかを認識することはできません。私たちは福音を聞いて悔い改め、自分が罪深いことを認識しました。しかし私たちがいかに罪深いかは、キリストを全焼のささげ物として享受するまで知ることはできません。全焼のささげ物は、神を表現し代行するために神によって創造された人類が、神以外の何もののためでもあるべきではなく、神のために絶対的であるべきであることを意味します。しかしながら、私たちは神のために絶対的ではありません。私たちはこれを認識し、キリストを私たちの全焼のささげ物とする必要があります。私たちはキリストを全焼のささげ物として享受するときはじめて、自分がいかに罪深いかを認識するでしょう。

私たちは、自分がいかに罪深いかを認識するなら、私たちの愛が憎しみと同じように罪深いことを知るでしょう。倫理的に、人を憎むことは間違っており、人を愛することは正しいのです。私たちは、神の目に人を愛することは受け入れられ、人を憎むことは受け入れられないと思うかもしれませんが、しかし神の目に、私たちは自分自身のために人を憎み、自分自身のために人を愛するのであって、神のためではないのです。この観点から、人を愛することは人を憎むことと同じように罪深いのです。私たちが行なうことが自分自身のためであって、神のためでないことは何であれ、それが道徳的であっても不道徳的であっても、良くても悪くても、愛の事柄でも憎しみの事柄でも、神の目に罪深いのです。あなたが自分自身のためにある事を行なう限り、それは罪深いのです。神が私たちを創造したのは、私たちが神のためであるためです。神が私たちを創造したのは、私たちが彼の表現また代行となるためでした。彼は私たちを、私たち自身のために創造したのではありません。しかし私たちは、神から独立して生きています。私たちは人を憎むとき、神から独立しており、人を愛するとき、やはり神から独立しています。

中高生編

あなたは幼い時、文化や道徳の囲いの中で育てられる必要があります。しかし、中高生位になると徐々に文化から出て、キリストの中に入ることを学び始めるべきです。文化や道徳はユダヤ人にとっての律法のような働きをします。それはキリストが来るまで、あなたを保護する羊の囲いのようなものです。キリストが来るとは光が来ることであり、キリストが来れば、それは夜間ではなく、日中です。キリストが来た日中は、羊たちは羊の囲いから出て、緑の牧場に来て、水や牧草としてのキリストを享受すべきです。中高生、あるいは小学6年生位から、あなたは徐々に文化的、あるいは道徳的な基準ではなく、キリストに従って神の標準を生きるべきです。

文化的、道徳的な基準に従うと、人を愛することは、常に正しいことです。しかし、聖書の観点、あるいは神の観点から物事を見ると、ある愛は人を真に駄目にしてしまいます。例えば、ダビデの息子アブサロムがダビデに反逆して殺そうとした時のことを見ます。ダビデの勇者たちが最終的に戦いを制した時、ダビデはアブサロムのために泣き続け、軍の長ヨアブを慰労しませんでした。この時、ヨアブは言いました、「今日あなたは、すべてのしもべの顔をつぶされました。…あなたは自分を憎むものを愛し、自分を愛する者を憎まれます(サムエル19:5-6)」。その後、ヨアブはこのことも起因して、別の反逆に加わり、ダビデの反対者と共に滅びました。ダビデの天然の愛が、大混乱をもたらしたのです。この原則は、あなたの学校生活においても同じです。

あなたが自分の利益のために、自分の栄光のために人を愛することは間違っています。なぜなら、人はまず第一に神のためでなければなりません。神のために生きる人は、自分の愛が自分自身から出ているのか、神から出ているのかを識別するために祈ります。実は、人類社会の大混乱は、人の墮落した憎しみからだけでなく、人の天然の愛からも来ているのです。人が神からのものを愛し、サタンからのものを憎むことができれば、ほとんどの混乱は回避できます。しかし、人は憎むべきものを愛し、愛すべきものを憎んでしまうので、大混乱に陥ってしまうのです。

あなたはクリスチャンとして、道徳の最高水準を生きるべきです。この最高水準の道徳は、文化的な道徳の水準よりもはるかに高いです。最高水準の道徳は、まず神のために絶対的であることを要求します。

経験②: 天から下ってきた全焼のささげ物の火によって、燃え続ける

信者たちは、自分の体を生きた犠牲としてささげることによって、キリストのからだの中に生きます。ローマ人への手紙第12章1節でパウロは言います、「兄弟たちよ、こういうわけで、私は神の慈しみを通して、あなたがたに勧めます。あなたがたの体を、神に喜ばれる、聖なる、生きた犠牲としてささげなさい。それが、あなたがたの理にかなった奉仕です」。からだの生活を持つには、私たちの体を主とからだの両方にささげる必要があります。私たちはからだのために、私たちの体を主にささげるべきです。彼の救いにおいて、主は私たちの体を敵サタンに横領の手から解放してくださいました。今や、私たちはキリストとの有機的な結合の中で、私たちの解放された体をからだの生活のために主にささげる必要があります。

神に対するすべての奉仕は、全焼のささげ物の祭壇の火に基づいていなければなりません。旧約において、祭司たちは神の御前で香をたきました。香をたくことは、人が神にささげる奉仕を象徴しています。香をたくために用いられた火は、全焼のささげ物の祭壇から取ったものでなければなりません。もし全焼のささげ物の祭壇の火をもって香をたかないなら、すなわち、異火をささげるなら、その人の奉仕は神に受け入れられず、その人は死の裁きを受けます。この例証は、私たちの神への奉仕は、全焼のささげ物の祭壇の火に基づいていなければならないことを示しています。

在職青年編

あるオリンピックの金メダリストは、自分の栄光のためという火によって自分を燃やします。また、別の人は、自分を信じ、自分をサポートしてくれた人のためという火によって自分を燃やします。前者は人間性の良くない金メダリストであり、後者は人間性の良い金メダリストです。しかし、あなたはクリスチャンとして、どちらの火によっても自分自身を燃やしてはいけません。あなたを燃やす火は、全焼のささげ物の祭壇の上の火でなければなりません。

あなたは召会で奉仕する時も、在職生活で奮闘する時も、自分のために燃えて行なってははいけません。世の中の人は皆、そのようにしているので、自分も少くらいそうしても良いのではないかと考えてはいけません。神の目から見て、神からの、天からの火だけが正しい火であり、それ以外のすべての火は異火であって、決して神によって受け入れられません。全焼のささげ物は、あなたの献身とも関係があります。全焼のささげ物に天から火が下ってきて、それを焼いたように、あなたが献身する時、霊的な火はあなたの霊を燃やします。更に、この火は天然の火とは異なり、決して消えることはありません。それは、あなたの天然のものを燃料としておらず、燃え続ける火です。出エジプト3:2 すると、エホバの御使いが、いばらやぶの中から火の炎の中で彼に現れた。彼がよく見ると、いばらやぶがあり、火で燃えていたが、いばらやぶは燃え尽きなかった。【T】火がいばらやぶの中で燃え、それを燃やし尽くさなかったという事実は、モーセではなく神ご自身が、燃えるための「燃料」であることを示します。

あなたがビジネス・ライフにおいて成功するために、あなたは燃えていなければなりません。しかし、あなたは天然の火によってではなく、天からの火によって燃えていなければなりません。このために、あなたは次のことを行なってください。

1. 毎朝、御言葉の中の聖霊の火によって燃やされ、献身を更新する: 聖書の言葉の中には、命の養いと命の水の洗いがあるだけでなく、聖霊の火があります。あなたが自分の霊を活用し、御言葉を擦る時、炎が立ち上がり、聖霊はあなたの霊の中で燃えます。そして、あなたは毎朝、再び自分自身を主にささげるべきです。
2. 霊の中で燃え、主に仕えなさい(ローマ12:11): 会社で仕事をするとは、主に仕えることの一部です。あなたは、自分のビジネス・ライフを主にささげるべきです。そして、神のために、神の証しのために、業務を勤勉に、一生懸命遂行すべきです。そうであれば、あなたは聖霊の火によって燃やされて、神の栄光のために仕事をしているので、神は必ずあなたの物質的な必要を豊かに供給して下さり、更に職場において霊的な力強い証しを立ててくださいます。

過去二十世紀とおし

過去二十世紀とおし、
 千万の貴ちょうないのち
 ころのたから
 高貴な地位
 かがやかしい前途
 主-イエスに
 無駄づ-かいされてきた
 主を愛すものに
 主は愛らしく
 すべてさ-さぐ
 ささぐにふさわしいかた
 主にそそいだのは 無駄でない
 香-ばしいあかし
 甘き主 あかしす
 主にそそいだのは 無駄でない
 香-ばしいあかし
 甘き主 あかしす

已過二十世紀以來

已過二十世紀以來
 千千萬萬寶貴的性命、
 心愛的奇珍、崇高的地位、
 以及燦爛的前途、
 都曾枉費在主耶穌身上。
 對這些愛主的人、
 祂是全然可愛、
 祂是全然可愛、
 配得我們獻上一切、
 我們澆在主身上的不是枉費、
 乃是馨香的見證、
 見證祂的甘甜。

Throughout the past twenty centuries

Throughout the past twenty centuries
 Tens of thousands of precious lives,
 Heart treasures, high positions,
 And golden futures have been "wasted"
 Upon the Lord Jesus.
 To the ones who love Him in such a way
 He is altogether lovely and
 worthy of their offering.
 What they have poured upon
 the Lord is not a waste
 But a fragrant testimony of His sweetness.
 What they have poured upon the Lord is not a
 waste
 But a fragrant testimony of His sweetness.

228 その靈の豊満 十字架を通して

- 主よ、血しおにて われをあらい、
 きよきあぶらを そそぎたまえ。
 わがせいかつは 失ばいのみぞ、
 れいに満たせや、 主のため生く。
 (復)ああ、主よ、自己より、解きはなちませ！
 いまよりとわに 主を満たせや。
- なんとかわきし われのころ、
 れいの満たしを せつにもとむ。
 打たれたいわに われをかくし、
 生けるみずにて、 あふれさせよ。
- 冷えたるころ、 にぶきあゆみ；
 聖れいに満たせ、 主にそむかず。
 さい壇のうえに、 わが身を置く；
 主の火よ、くだり、 焼き尽くせや。
- 主よ、十字架にて さらに燃やせ、
 われ、はいと化し、 主、増すために；
 日ごとその靈を 満ち満たせや、
 生けるいのちを ながすために。

228 聖靈の豊満 藉十字架

1. 求主宝血洁净我，洗尽所有罪过，
 将你圣洁的膏油，重新为我涂抹。
 我认自己的生活，真是失败、软弱，
 我望充满你的灵，完全为你而活。
 (副) 哦，求主救我脱离 这个可怜的自己！
 求主使我从今后，完全充满了你。
2. 我心何等的干旱，常为软弱悲叹；
 我是何等的盼望，能被圣灵充满。
 求主让我今隐藏，在你击伤石磐；
 求主今听我呼求，让你活水泛滥。
3. 我心何等的冷淡，顺服何等迟慢；
 愿主圣灵充满我，使我不再背叛。
 我今躺卧在祭坛，不敢稍为动弹；
 求主烈火从天降，把我所有烧干。
4. 求主十架在我身，天天作工更深，
 把我度量扩充大，使我化为灰尘；
 好叫圣灵充满我，天天比前更多，
 你的活水到处流，解除众人干渴。

280 Fullness of the Spirit - By the Cross

- 1 Lord, may Thy blood now cleanse me,
 Wash all my sins away,
 That with Thy Holy Spirit
 Thou may anoint, I pray.
 My service, I confess, Lord
 Is failure-full and weak
 The filling of Thy Spirit
 To live for Thee I seek.
- (C) Oh, from myself deliver,
 From all its misery;
 I'd henceforth be forever
 Completely filled with Thee.
- 4 Oh, may Thy Cross within me
 Deepen its work and burn,
 In me enlarge Thy measure,
 And me to ashes turn.
 Oh, may Thy Spirit fill me
 Each day more than before,
 And may Thy living water
 On me and thru me pour.